【論　説】

近江商人中江勝治郎の北米商業視察

――三中井創業者――

末永國紀

目　次

はじめに
一　三中井の創業者中江勝治郎
二　大正十三年の北米商業視察
むすび

はじめに

広域活動を一つの特徴とする近江商人は、近代においては貿易のみならず、直接海外へ出店を設置しあるいは本店そのものを移すものも現れる。**表1**は近江商人の三大淵叢地である蒲生・神崎・愛知三郡の朝鮮・台湾を含む中国大陸と南北アメリカ大陸への出店一覧表である。蒲生郡は八店、神崎郡と愛知郡は各々二四店である。地域別では中国大陸が四七店、アメリカ大陸は九店であり、開設の時期は依拠資料の刊行年の制約もあるが明治四〇年を中心とする

表1　湖東三郡の大陸出店一覧

	店舗所在地	営業種	出店年月	町村字名	氏名
愛知郡	大連市	製薬	M40	東押立村大沢	野村宗
	朝鮮鎮海面	種物卸・借家	M43	西押立村北菩提寺	浅岡甚助
	奉天大北門大街	雑貨	T 7	西押立村南菩提寺	小島和三郎
	朝鮮平壌	雑貨	M40·5	豊国村東円堂	広島彦市
	朝鮮平壌	雑貨	M40·5	豊国村東円堂	広島彦十郎
	朝鮮京城	ロープ商	M45	八木荘村上	森政吉
	満州奉天	食料品	M39·3	八木荘村下八木	小杉與治郎
	朝鮮新義州	呉服	M37	八木荘村島川	西堀外治良
	満州撫順	太物	T 2·9	八木荘村島川	西堀吉蔵
	朝鮮釜山	雑貨	T9·11	八木荘村島川	北川七兵衛
	朝鮮平壌船捲里五四	呉服太物	T12	八木荘村矢守	杉立與治郎
	英領加奈陀晩香坡市西カドバ街	伐木輸出入雑貨食料品	T11	秦川村北蚊野	外川二郎
	大連市	呉服	T 3	秦川村北蚊野	北村新七
	英領加奈陀晩香坡市パウエル街	菓子製造	T 6	秦川村北蚊野	青木清一
	朝鮮京城	米穀	T 6	秦川村北蚊野	北村文吾
	青島招遠路五十四号	菓子	M44	葉枝見村本庄	田口慶太郎
	英領加奈陀晩香坡	時計商	M45	葉枝見村本庄	山村政治郎
	朝鮮咸鏡北道清津府	酒醤油卸	M40	葉枝見村本庄	徳田米吉
	英領加奈陀晩香坡市	時計装飾品	M38	葉枝見村誓光寺	河合喜代造
	北米合衆国シャトル市	魚商	T13	葉枝見村誓光寺	河合清吉
	台湾台北市	化粧品雑貨	S 2	葉枝見村田附	西田久太郎
	朝鮮大邱府	化粧品小間物	T 3	葉枝見村田附	富江仲次郎
	大連	化粧品小間物	T10	葉枝見村田附	居原田粂三
	南米ペルー市	食パン	M35	葉枝見村上服部	寺島喜十郎
神崎郡	朝鮮大邱	呉服太物	T12	御園村寺	山田重一
	朝鮮京城	呉服太物	M40	御園村中小路	山田留吉
	朝鮮京城	呉服太物	M44	御園村中小路	梅本定吉
	朝鮮京城	呉服太物	M44	御園村中小路	広田鹿造
	朝鮮元山	金庫	M44	御園村妙法寺	山田栄三郎
	朝鮮	綿布	M17	八日市町浜野	高瀬政太郎
	ハルビン	絹織物雑貨	M40	八日市町金屋	梅原米治良
	台湾台南	提燈雨傘油紙	M31	朝日村奥	西藤吉
	大連市	呉服	T 1	朝日村北町屋	加地兼次郎
	朝鮮京城	小間物呉服	T 4	南五個荘村金堂	中江和平治
	朝鮮京城	呉服	M45	南五個荘村金堂	中江勝次郎(ママ)
	（他に釜山・大邱・鳥致院・平壌・元山・晋州・木浦に支店あり）				
	台湾台北	呉服	M34	南五個荘村七里	奥野磯治郎
	朝鮮平壌	呉服	M40	北五個荘村宮荘	竹中佐治郎
	朝鮮平壌	石粉寒水石	T11	北五個荘村宮荘	竹中佐治郎
	朝鮮京城	精米	M43	北五個荘村宮荘	竹中治兵衛
	朝鮮大邱	雑貨	M35	北五個荘村和田	中村平四郎

	朝鮮京城	雑貨	T 8	北五個荘村和田	中村忠一郎
	朝鮮慶尚南道晋州	陶器	T 2	北五個荘村和田	中村　忠七
	カナダ	材木	T12	五峰村山路	小南仁三郎
	青島	呉服太物	T 5	能登川村能登川	馬場長兵衛
	大連	呉服太物	M34	能登川村北須田	小島　新三
	朝鮮忠清南道礼山郡	荒物	T 1	八幡村種	森　又五郎
	朝鮮釜山	家具	M41	八幡村小川	中田　久弥
	北米桑港	雑貨	M33	栗見荘村新宮東	森野　庄吉
	米国桑港	日本食品問屋	M38	日野町大窪	岡田小三郎
	朝鮮京城	旅館	M33	日野町大窪	川島　為吉
	朝鮮京城	菓子	M38	日野町日田	野田　佐一
	朝鮮元山港	陶器	M27	日野町村井	辻　惣兵衛
蒲	支那大連	硝子板硝子器	M38	日野町村井	深尾　栄吉
生	支那大連	硝子板硝子器	M38	日野町村井	深尾　栄吉
郡	支那大連市	綿布商	M39	市辺村蛇溝	村田孫左衛門
	支那青島市	綿布商	T 2	市辺村蛇溝	村田孫左衛門

注1.『近江愛知郡志』巻三（昭和４年刊）・『近江神崎郡志稿』上巻（大正13年刊）・『近江蒲生郡志』巻五（大正11年刊）．Mは明治、Tは大正、Sは昭和。
2. 出店は開設年不明は除外。

前後一〇年間位が最も多くなっている。中国大陸の出店の業種は呉服をはじめとする繊維品が三分の一以上を占め、次いで雑貨・小間物類であり、近江商人の伝統的取扱商品である。アメリカの場合は食品関係がやや目立っている。

中江勝治郎を中心とした中江の四人兄弟によって創立された三中井は、明治末期から朝鮮に呉服店を出店し、百貨店化しつつ昭和期に入ると朝鮮・中国に十数の本支店を張り巡らせ、敗戦とともに一朝にして壊滅した劇的存在である。本稿の目的は、その広域志向の営業活動が近代日本の国際的位置や国際関係の影響を受け、それといかに不即不離の関係にたちながら進められていったかということを、創業経営者自身の北米商業視察日記に依拠しながら具体的に明らかにすることである。そのことによって中国大陸と北米大陸に展開した日系移民の軌跡の対照性が浮き彫りになるのであり、両大陸において展開した近江商人の足跡を辿ることは、これまで埋もれたままであったもう一つの近江商人像の掘り起しにつながるのである。(1)

一　三中井の創業者中江勝治郎

三中井の創業者である中江勝治郎は、近江国神崎郡金堂の呉服小間物商中江屋の長男として明治五年正月二十七日に出生した。幼名は善蔵、和歌や漢詩を嗜み隠居後は江月と号した。江戸時代の金堂は、享保九年以来明治維新まで大和郡山藩柳沢氏一五万一二〇〇石の所領であり、蒲生・神崎・坂田・浅井・高島の諸郡に点在する五万八〇〇〇石の近江国内の所領統治のため金堂陣屋が置かれていた。(2) 金堂の寛文四年の村高は八八九石、田畑屋敷面積五八町三反四畝二二歩である。(3)『滋賀県物産誌』によると明治一三年頃の村勢は次の通りである。(4)

人口　八九五人、但平民
人戸　一九六軒
農一一八軒　傍ラ布縞ヲ織り又ハ編笠ヲ製ス
工一一軒　大工左官桶職等ナリ
商六七軒　呉服太物及荒物小間物造酒造醤油等ノ商業ニシテ、他国へ出店ヲ設ルモノ一三戸アリテ、行商ヲ事トスルモノ一二人アリ
反別　七三町五反九畝二一歩
地価金　四九六六七円五四銭

表2は神崎郡全村の人戸の類別と、人戸に対する商家の割合を示したものである。(5) 金堂の商戸比率は三四・二%であり、これは神崎郡八五カ村のなかで一三番目に高い比率である。金堂より商家比率の高い村を順に挙げると、六三・八%の八日市を筆頭に佐生・中・北町屋・木流・宮庄・須田・能登川・猪子・新堂・竜田・七里の村々である。他

表2　神崎郡村々農工商戸数調べ

	村名	人戸	農	工	商	商%(対人戸)
東部5カ村	相谷	110	110			0
	佐目	55	55			0
	萱尾	32	31		1	3.1
	蓼畑	32	32			0
	杜葉尾	81	81			0
中部37カ村	宮庄	264	130	15	119	45.1
	竜田	141	85	3	53	37.6
	北町屋	116	55	6	55	47.4
	山上	320	258	22	40	12.5
	和南	35	35			0
	河合寺	29	29			0
	池田	77	59	3	15	19.5
	寺	38	32	2	4	10.5
	岡田	21	18		3	14.3
	今田居	38	29	1	8	0
	横井	156	156			0
	林田	79	71	3	5	21.1
	上	20	14	1	5	25.0
	神田	73	73			0
	中小路	39	22	4	7	17.9
	外	74	74			0
	妙法寺	64	64			0
	野	61	61			0
	上日吉	75	60		15	20.0
	三俣	36	26	7	3	8.3
	平坂	30	27		3	10.0
	奥	101	101			0
	伊野部	60	47	8	5	8.3
	新堂	90	53	3	34	37.8
	山本	139	67	7	65	24.1
	木流	79	57	3	19	46.8
	石塚	31	23	1	7	22.6
	瓦屋寺	45	31	4	10	22.2
	北	51	51			0
	南	32	32			0
	堺	47	47			0

	上中	62	62			0
	浜野	131	80	14	38	29.0
	下野	67	64		3	4.5
	八日市	268	51		171	63.8
	小幡	152	98	8	46	30.3
	中	64	24	8	32	50.0
西部43カ村	山路	128	109	4	15	11.7
	伊庭	496	317	37	142	28.6
	能登川	237	121	13	103	43.5
	猪子	54	33		21	38.9
	須田	89	43	6	40	44.9
	垣見	69	64	1	4	5.8
	種	160	110	12	38	23.8
	躰光寺	124	114	2	8	6.5
	林	36	31		5	13.9
	佐野	137	93	5	39	28.5
	今	120	102	8	10	8.3
	川並	259	165	15	79	30.5
	塚本	61	37	4	20	32.8
	石川	30	25	2	3	10.0
	金堂	196	118	11	67	34.2
	石馬寺	97	65	5	27	27.8
	七里	82	47	2	29	35.4
	下日吉	99	73	5	21	21.2
	下稲葉	58	55		3	5.2
	上稲葉	43	34	8	1	2.3
	普光寺	65	63	2		0
	西川	58	58			0
	田原	62	62			0
	服部	107	89	3	15	14.0
	甲崎	59	59			0
	乙女浜	166	151		10	6.0
	新海	173	173			0
	新宮	181	133	6	42	23.2
	田附	172	155	7	10	5.8
	本庄	226	205	6	15	6.6
	小川	174	164	*	*	0
	川南	86	86			0
	阿弥陀堂	82	82			0

	新田	107	107			0
	栗見在家	68	68			0
	栗見出在家	237	237			0
	福堂	108	101	2	5	4.6
	三ツ谷	40	19		21	52.5
	佐生	165	126	4	35	21.2
	簗瀬	28	24	1	3	10.7
	川曲	52	40	1	11	21.2
	和田	51	40	5	5	9.8
	長寺	103	78	5	20	19.4
	勝江					

『滋賀県市町村沿革史』第五巻425～482頁より作成。
＊印は人戸数と内訳が一致しない箇所。

に商家比率が三〇％を越えているのは塚本・川並・小幡の三カ村である。神崎郡内では商戸比率が三〇％を越すのは郡内の中西部であり、江戸時代は御代参街道の宿駅や地域中心市場の機能を有していた八日市を除くと、金堂はこれらの商業活動の盛んな村々のまさに中心部に位置している。勝治郎の出生した金堂が近江商人の一大淵叢地帯であったということは、ここでも鮮明になっている。

次に中江家の家系については、四百字詰め原稿用紙計七四枚に墨で書かれた勝次郎自筆の記録がある。(6) その内容の大半は、勝治郎の祖父の代までの中江家の歴代当主夫妻の簡単な事歴と終焉・葬礼の模様を記した五二枚である。この原稿は、綴じられてなく、表題も付けられていないので、以下では「中江家譜記録」と称することにする。この「中江家譜記録」にはその外に、昭和七年の「祖廟新調」と題する三枚の原稿、昭和九年一一月一五日～二月四日までの上京時の五枚の日録、それに一四枚からなる勝治郎の母親の実家河添家の家譜が綴られている。

「中江家譜記録」にもとづいて、要点を引用摘記しながら同家の家系を略記しておこう。

中祖初代半左衛門　寛文二年正月二五日生、寛保三年一〇月五日没、八二歳、

法名は釈道法

「呉服小物商ヲ経営ス、二十五歳ニシテ妻もとヲ川並村ヨリ娶リ、翌年長男出生作右衛門ト名ツク、六一歳ノ還暦ヲトシテ家業ヲ譲リ」隠居

妻「もと」は、寛保三年一一月没、七六歳、法名釈尼妙法

二代作右衛門

半左衛門の長男、貞享四年二月一五日生、明和四年一二月十日没、八一歳、法名釈道法、

「二十六歳ニシテ高野村ヨリ妻つぎヲ娶リ長男作蔵ヲ挙ゲ、三十五歳ニシテ家業ヲ相続シ呉服小間物商ヲ営ミ、六十五歳ニシテ家業ヲ譲リ」隠退

妻「つぎ」は明和五年一二月十日没、七五歳、法名釈尼妙法

三代作右衛門

享保六年三月一五日生、安永七年正月四日没、五八歳、法名釈道法

「二十八歳ニシテ石川村市田甚五兵衛長女よつト結婚シ三十一歳ニシテ家業ヲ継キ、幼名作蔵ヲ改名シテ作右衛門ヲ襲名ス、三十八歳ニ至リ長男久左衛門出生ス」

妻「よつ」は天明五年八月二八日没、五八歳、法名釈尼妙法

四代久左衛門

宝暦九年四月一二日生、文政元年六月二八日没、六〇歳、法名釈道法

「二十一歳ニシテ父ヲ失ヒ、母ノ補助ヲ得ツヽ、家業ヲ継承シ、二十五歳ニシテ美濃國多岐郡一色村林甚右衛門長女きしヲ娶リ、二十七歳ノ時長女さゑヲ産シ、二十九歳ニ長男和兵衛ヲ産ミ、寛政三年二月二十七日二男久一ヲ産セシモ同三月五日生存僅ニ三十日ニシテ死去ス、釈浄念ト諡シ石馬寺ニ葬ル、翌四年四月五日三男善蔵誕生ス、五十九歳ニシテ家業ヲ長男和兵衛ニ譲ル、長女さゑハ二十八歳ノ時同郡下日吉村山脇五兵衛ニ嫁セシム」

妻「きし」は天保三年三月一八日没、七四歳、法名釈尼妙法

五代和兵衛　天明八年五月一五日生、文政六年一一月二日没、三六歳、法名釈道喜

「三十一歳ニシテ家業ヲ継キシガ、翌年父ヲ失ヒ三男久蔵ト共ニ呉服小間物商ヲ勉メ、文政四年正月三男久蔵三十歳トナルヲ以テ、同村北出ニ分家セシメ同商ヲ経営セシム」

六代久左衛門　寛政四年一一月一一日生、明治七年三月一一日没、八三歳、法名清慈院釈道法

「幼名久蔵ト称シ元服シテ勝治郎ト改名ス、文政四壬巳年正月三十歳ニシテ北出ニ分家シ資本金六両貳朱ヲ以テ呉服太物小間物商ノ独立開業ヲナシ、同三月同村西村藤左衛門長女さと二十歳ヲ娶リ、日夜業務ニ精励シ、文政五年癸午正月初メテ勘定帳ヲ創製シテ第一回棚卸勘定ヲナシ、二十五割ノ純益ヲ計上ス、然ルニ四年八月長兄和兵衛死去シ本家相続者ナキヲ以テ七年正月復帰シテ本家ヲ継承ニ(ママ)商号中江屋本店ヲ経営ス、文政八年三月長女もとヲ出産ニ、同九年十月長男和兵衛ヲ産シ、同十二年六月二女いくヲ出産ス、（中略）天保六年五月三女みきヲ産シ、同八年五月二男善蔵ヲ生ミシモ九年八月六日死去ス、（中略）天保十年六月二十八日三男誕生ス、翌十一年さと女ハ病魔ノ侵ス所トナリ医薬其功ナク六月十三日五児ヲ遺シテ遂ニ逝去ス、（中略）天保十一年七月十五日西村藤左衛門方ヨリ同妹三十五歳ヲ迎ヘテさとト改名シテ後妻トス、（中略）天保十二年二女いくヲ下日吉村山脇五兵衛へ養女トシテ遣ス、同家ハ九、十、十一年ニ四子ヲ死亡セシメ資子無キヲ以テナリ、時ニいく女十三歳ニシテ叔母ノ許ニ養育セラル、弘化二年十月長女もと川並村河井仙右衛門ニ嫁ス、嘉永五年十月三女みきヲ北町屋村市田新蔵へ嫁カセシメ、六年三月当村西村弥七長女たけヲ長男和兵衛

ノ妻ニ娶リ、安政二年初孫うのヲ出生ス、三年一月六十五歳トナルヲ以テ家業ヲ譲リ隠居ヲナシ、佛門ニ寄恵（ママ）シテ寺詣ヲ業トス、道ヲ歩ムニ必ズ両手ヲ袖底ニ張リ直行ス、世人其謹直ナルヲ賞シテ袖久ト字名スルニ至ル、尚餘暇アレバ絲繰等ヲナシ、苟モ時ヲ空費スルコトナシ、然ルニ無常ハ時ヲ慊（ママ）ハズ、（中略）和兵衛病床ニ臥シ薬石其功ナク安政四丁巳年八月二十日三十二歳ヲ一期トシテ黄泉ノ客トナル、時ニ次男久蔵十九歳ナルヲ以テ再ビ家業ヲ助ケテ久蔵ノ教育ヲ事トシ、尚十年若返リヲナシテ努力セント自ラ誓ハレ日夜業務ニ出精セラル、爰ニ於テ家業大ニ繁栄シ毎決算ニ利殖好果ヲ奏ス、元治元年七十三歳ノ時隠居、二階建瓦葺三十二坪ヲ建築ス、慶応二年三月同村河添源治郎妹とせ十八歳ヲ迎ヘ次男久蔵ニ娶セ、戸主ヲ譲リテ名モ共ニ襲カシメ久左衛門ト改名シテ隠居ヲナス、（中略）明治五年正月二十七日孫善蔵誕生ヲ喜バレ我松明持ヲ得タリト感喜セラル」

先妻「さと」は天保一一年六月一三日没、三八歳、法名釈尼妙圓、後妻「さと」は明治四年八月十二日没、六五歳、法名釈尼妙法

この記録の依拠史料は不明である。期日や人名に若干の食い違いもあるが、忌日、法名、葬礼の次第が明記されているので菩提寺である金堂の弘誓寺の記録が加味されていることも考えられる。右に摘記した家譜によれば、中江家は代々神崎郡金堂に居住し、近隣の村々を婚姻圏としながら当初から呉服小間物商を営んできたのであり、商号を中江屋と称したという。その具体的な経営形態までは窺うことは出来ないが、六代目の久左衛門が、文政四年に呉服小間物商を分家開業した際の元手金が六両二朱という僅少なものであったこと、その年一年間の純益が二五割であった

ことからすれば、農業のかたわら持下り商内を実施していたと考えてよいであろう。その意味では中江家は、近江商人の在村形態の枠のなかにあったということができる。

右の「中江家譜記録」の六代目の項からも判るように、「勝治郎」名は六代久左衛門が初めて名乗った名前であり、七代目も勝治郎を襲名している。したがって三中井創業者の勝治郎は、「勝治郎」襲名者としては三代目である。この三代目勝治郎の履歴は、大正一三年の北米商業視察渡航に際して、八日市警察署へ提出した履歴書の控によれば次の通りである。(7)

履歴書

滋賀県神崎郡南五ケ荘村金堂百〇壱番屋敷
滋賀県平民戸主　中江勝治郎
明治五年正月二十七日生

一、明治二十年三月明新学校高等一級卒業ス
一、同年八月ヨリ美濃伊勢尾張へ呉服行商見習ヲナス
一、同二十三年八月ヨリ協同組合ニテ同卸商ニ従事ス
一、同三十年六月父死亡ニ付家督相続シ其遺業ナル呉服商ヲ経営ス
一、同三十八年一月朝鮮大邱府ニ呉服商店ヲ設置ス
一、同三十九年五月村会議員ニ当選ス
一、同四十三年五月村会議員ニ当選ス

一、同四十四年三月従来ノ家業タル呉服商ヲ朝鮮京城ニ移シテ六月開店ス
一、大正二年六月朝鮮元山ニ支店設置ス
一、同五年釜山ニ支店設置ス
一、同七年四月京都市ニ仕入店ヲ創設ス
一、同七年五月三度村会議員ニ当選ス
一、同八年六月平壌ニ支店ヲ設置ス
一、同十一年二月各本支店ヲ合セテ株式会社三中井呉服店ヲ組織シ其社長ニ推サレ在職中ナリ
一、同年五月四度村会議員ニ当選シ目下在職中
一、同十二年一月村長ヲ拝命シ目下奉職中
一、同年三月東京市ニ呉服支店ヲ設置ス
一、同年四月大垣市ニ支店ヲ開設ス
一、大正十三年四月東京市道玄坂ニ支店ヲ設置ス
一、賞罰ナシ
以上
大正十参年五月十五日

中江勝治郎

三代目勝治郎は明治五年神崎郡金堂に出生し、二〇年、一五歳で金堂尋常小学校の前身として明治六年に弘誓寺の

一角に開設された明新学校を卒業している。[8] 同年八月から呉服卸商見習いのため美濃・伊勢・尾張へ出かけている。ここで勝治郎は持下り商内の体験者であることが明確になる。三〇年六月、父二代目勝治郎の死去によって家業の呉服商を相続することになった。二代目勝治郎には、長男の勝治郎の外に、同じ金堂の西村家の養子となった明治八年生まれの次男久次郎をはじめ、三男富十郎、四男準五郎という三人の弟がいたのであり、以後の事業展開に協力することになる。そして日露戦争の帰趨も定かでない三八年一月朝鮮大邱に呉服商支店を出している。四四年六月には呉服商本店を京城に移し、大正二年六月元山、五年釜山、八年六月平壌に各々支店を設置し、日本国内でも七年に京都市に仕入店を創設している。さらに大正一一年二月には本支店を糾合した株式会社三中井呉服店を組織して、勝治郎が社長の座に就いている。その後も三中井本部を置いた南五個荘の村会議員や村長を勤めながら、一二年三月に東京市の呉服支店、[9] 四月に大垣支店、翌一三年四月には東京市道玄坂にも支店を開いている。[10] ただこの履歴書には、明治三九年の晋州支店設置と大正三年の兄弟四人による合名会社結社のことは脱落している。

勝治郎が大陸へ商圏を拡大していく直接の動機は、家伝によれば関釜連絡船でたまたま訪韓した富十郎が、現地民衆から衣類をはじめタオルにいたるまで売却を乞われたという体験談をもたらしたことにあったとされている。[11] 大正一三年の勝治郎の渡米体験は、この三中井の多店舗化と百貨店化を一層推進させていく重要な転機となった。では彼の北米商業視察旅行を振り返ってみよう。

二　大正十三年の北米商業視察

前項の履歴書にもあるように、大正一三年当時、株式会社三中井呉服店の社長であり滋賀県神崎郡南五個荘の村長でもあった中江勝治郎は、年初早々から欧米への商業視察に強い意欲を示した。直接の契機は、一月二四日に京都支

店において弟富十郎の紹介で、同人の竹馬の友であり米国留学の経験のある小泉精三に際会したことである。精三は滋賀県神崎郡旭村の出身で、貿易商として兵庫県武庫郡芦屋村に居住し[12]、渡米の予定を明らかにしたことに対し、勝治郎が同行を依頼して承諾を得たのである。

勝治郎の渡米時の記録は、二冊の手帳に日記として残されている[13]。一冊は、大正一三年一月から六月十日神戸港出帆までの準備期間の要点を記したものと、太平洋航海中の日記と八月二六日までの滞米日記からなっていて、清書されている。但し、八月一八日と一九日の両日分は欠落している。他の一冊は、滞米中の八月二日から九月一五日帰国し、帰国報告する九月二十日までの日記と、「海陸旅行里程」、及び六月十日から八月一四日までの「米国旅行費用摘要」を記した下書である。前者を「清書日記」、後者を「下書日記」と称することにする。

「清書日記」の準備期間の記録によれば、渡米の効果をより大ならしめるためという精三の勧告に従って、勝治郎は「英語・独学」の学習と欧米の歴史書・地理書・見聞録・キリスト教に関する書籍を購入して予備知識の補給に努めた。一方、五月三日には精三の親戚で、勝治郎と同年配の神崎郡山本出身で大阪の呉服商小泉重助が同行者に加わることになった[14]。三者協議の結果、渡米出帆は六月一一日神戸正午発のパンパシフィックメールのウィルソン号と定め、ホノルルへ二一日寄港、二七日桑港着の予定を立てた。五月一三日、地元の八日市の警察署へ出頭提出された勝治郎の「外国旅券下附願」には、旅行先地名として「米国及英領カナダヲ経テ英国佛国獨乙墺國伊太利其他奥州各国」が挙げられ、旅行目的は「商業研究兼自治視察」とされ、旅行期間は「大正一三年五月二八日出発一ケ年間ノ予定」となっている。この旅券出願の際、勝治郎は身長五尺三寸八分と測定されている。六月三日に第五四八七七九号の旅券を入手した。七日、五個荘金堂の親戚知己を訪問して旅行の挨拶を済ませ、夜は氏神へ参詣している。翌八日は、トランク一個と手カバン一個の手荷物を準備し、二六人の親戚知友の見送りをうけ、自動車で能登川から京都支

店へ向かい、九日は精三、重助と同行して神戸へ赴き、太平洋郵船会社・米国領事館・英国領事館・正金銀行・警察署へ出頭して一切の渡航手続を了し、京都へ戻った。この日、乗船のウィルソン号の出航は一〇日午後四時と確定したことを知る。

六月十日以後の日記は、船中と滞米の日記である。日々の日課や見聞が克明に記入されている日記であるが、商業視察旅行としての内容と勝治郎自身の人物像を理解する上で参考となる箇所を、八月二六日までは「清書日記」、八月二七日以降は「下書日記」によって以下に摘出してみよう。

先づ出航の一〇日の日記には、京都から神戸出航までの様子が綴られているが、その一節に次のような感懐が記されている。

余ノ終生ニ特筆大書スベキ雄々シノ門出ノ日、千載ニ記念スベキ光栄ノ日、萬波ヲ踏破、先進國ノ實情ヲ親シク巡覧シ、小ニシテハ我三中井ノ発展ニ資シ大ニシテハ我國商業界に貢献セン、遠大ノ希望ト絶大ノ雄図、余年来ノ希望ヲ實現ノ日ハ来リヌ、意気昇天、余ノ意中ハヨク筆舌ノ致ストコロニアラズ、思ヘバ年頭舎弟ヲ介シ小泉氏ト會シテヨリ是ニ有半年、外ニ繁雑ナル渡航手續ヲハジメ渡航準備予備研究ニ日夜心身ヲ労セシニ幸ニ心身ヲ害フコトナク健康日マシニ増進、今日ヲ致セシハ神佛ノ加護祖先ノ守護ト謝スルト共ニ、同航ヲ諾セラレシ以来、事大小トナク懇切ニ誘導サレシ小泉精三氏ノ友情ニ感謝ノ外ナキ次第ナリ

ここには洋行の目的が、先進国の実状を視察して三中井のみならず日本商業界の発展を目的とした年来の願望であ

ると高揚した気分とともに記されているのであり、この壮図の実現を神仏と祖先に感謝し、渡航準備に関する精三の懇切な誘導に改めて謝意を表している。五二歳に達した社長と村長を兼務する身ながら、なお果断で若々しい情熱を保持していた人柄であったことを窺うことができる。この日、勝治郎が一等船室一〇九号室の乗客となった二万一〇〇〇余頓のウィルソン号は定刻午後四時に出纜した。

一一日、一旦清水港から上陸して汽車で東京へ向かい、大井町の社宅で一泊し、翌一二日は道玄坂支店を検閲した後、電車で横浜へ赴き再度ウィルソン号に乗船した。船が横浜を出航し愈々故国の山河が遠くなっていった時には、「刻々ニ隔リユク故国ノ山河ニ別レヲオシム、萬感胸ニセマリ名状シ難キ衝動ヲ与ヘ、感慨無量ノ中ニ船室ニ入リ、シバシ啞然（ママ）憮然―筆者、以下同ジ―タル有様ナリキ」と記し、深い感慨に浸されたことを正直に打ち明けている。

一三日からは、終日船中で過ごすことになるため規律的な日常を送るべく、早速次のような日課を定めている。

六月十三日

午前五時起床、本日ヨリ真ニ終日船中ニ過スベキ日トハナリシコトナレバ、船内生活ヲ愉快ニ有意義ニ費シ、且ツ害シ易キ健康ヲ保持増進ノ目的ト無聊ニ苦シムコトナキタメ、左ノ通リ日課ヲ定ム

日課

午前六時　起床　身支度
〃七〃　ヨリ　運動　国民体操
〃八〃　朝食
〃九時　ヨリ　英語復習

〃十一時〃　運動
〃十二時〃　英語学習
午後一時　晝食
二時　ヨリ　談論討議
四時　〃　運動
五時　〃　日記文通
午後七時　夕食
〃八〃　ヨリ　雑談
〃九〃　入浴
〃拾時　就寝

この日課はアメリカ到着の日まで、ほぼ順調に消化されていくのであり、勝治郎という人物の計画を遂行する上での細心で謹直な側面と目的に向かって努力邁進する一途な側面を合わせみることができる。

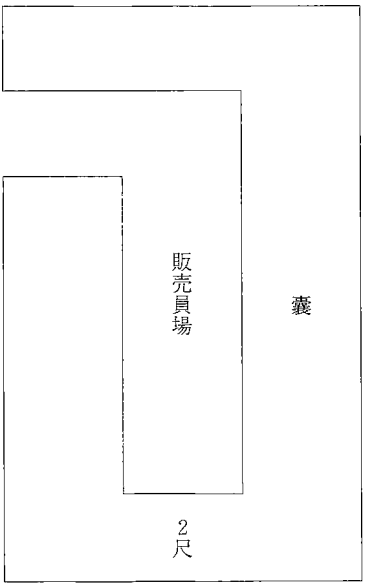
六月二二日ホノルルに入港し、自動車を雇って市内遊覧に繰り出した。その折りの市街地の印象を「道路ハスベテアスハルト道ニシテ車道十間、人道ハ両側ニ十尺巾ノモノニ設ケラレ電車ハ中央ヲ馳走セリ、（中略）両側ニハ二階三階五階西洋作リノ大廈高楼櫛比シ、街路井然繁華ナルコト限リナシ、商店ハウィンドヲ競ヒテ飾リ美麗例ヘンニ者ナク、就中キング街尤モ美観ヲ呈シ、自動車織ルガゴトク輻奏シ自転車少ク人力車ハ片影ダニ見セザルハ、サスガ異邦ノ大都タルヲ忍バシム」と記して、初めて実見した欧米都市の繁華街の有様に大いに感銘を受けている。またパイナップル工場を見学しているが、その規模と設備の広大完備していることに驚嘆すると同時に、同工場が八時間労働

制を採用し職工の賃金が時給一五銭であることも忘れず記入している。

サンフランシスコ上陸直前に滞米中の大略の旅程を決定している。サンフランシスコ上陸は六月二八日（現地二七日、以下同）、税関の検閲を終えて自動車で同地の一三階建てのセントフランスホテルに投宿した。当日は日本人会を訪問して当地の実況を聴取したり、参考書類を入手した後、市内観覧に出かけているが、同市を代表するエンポリアムデパートを視察した際は、商品の豊富なことに驚嘆し、日本人需要商品の概価を調査し、「大巾モノ縮面友仙ヤール三弗九十五仙、同甲斐絹ヤール一弗九十五仙、羅紗ヤール貳弗九十五仙ヨリ七弗五十仙」と記し、日本産の友仙奈染モス製日本筒袖が十弗五十仙と記録している。夕食後、マーケットストリートの夜景を見物して商店街の明るさと人目を引く広告意匠の斬新さに感心し、顧客を吸収するための店舗入口の工夫には特に興味を引かれ、日記に三例を図示している。

二九日（二八日）は終日、名所を含む市内観光に費やしたが、なかでも前夜訪れたマーケットストリートを再訪して商店経営について視察し、その印象を次のように克明に日記へ記入している。

各商店ウィンドノ装飾商品陳列法ニ腐心シ顧客ノ吸収ト販売能率増進ニ苦心著シキヲ見ル、同街〈マーケットストリート―筆者〉ニ於ケル新進商店トモ言ハル、ウルオーステンセンストアニ入ル、入口ハ前載第三図ノ様式ニ造ラレ、ウィンドウヲ見ル中知ラズ知ラズ店内ニ足ヲ運ビ商品ヲ見ルニ至ル、巧妙ナル設計ニシテ雑貨、菓子、レモン水、アイスクリーム等スベテ五仙、十仙、十五仙迄ノ品ヲ使用シ、各商品ヲ仕切ニ厚硝子ヲ以テセルハ範トスルニ足ル、通路ハ二尺巾ニシテ時ニ六尺ノ所アリ、販売員ハ総テ婦人ヲ使用シ熱心ニ従事シ、其通路ハ一尺五寸乃至二尺ニシテ僅ニ身ヲ入ル、ニ足ル位ナリ、一階ノミニシテ間口五間奥行十五間位、ウィンドハ他ノ装飾



ナク、商品ヲ総テ正札附ニテ体裁ヨリ豊富ニ陳列シ、實ニテンセンストアトシテ用意周到ナリ、其他繁栄セル店舗ハ総テ足ヲ運ビ實況ヲ視察セリ、人情人気ノ焦点ハ何處モ変リナク、緻密ナル注意ト親切丁寧ニ待遇シテ店舗ノ整済ト相マッテ好感ヲ与フル店、千客萬来ノ盛況タルニ変リナシ図解左ノ如シ

一商店ニ入リカラーボックスヲ買ハントスレバ、一店員イエスト答ヘテ種々取出セシモアマリ気ニ入ラズイヽト答フレバ、尚多ク取リ出シ来リテスコシノ嫌気ナク親切ニ一々見セシ中、気ニ入ル品ヲ持出セシカバ高價ナリシモ詮方ナク辛抱シテ買ヘバ（五弗五十仙）、言語通ゼザルモ彼手マネ或ハ名刺ヲ出シテ色々意ヲ通ジ、金文字ニテ鮮明ニ名ヲ入レンコトヲ言ヘルヲ判ジ、名前ヲ書ケバイエストテ尚何カシキリニ手ヲ振身振ヲナシテ熱心ニ傳エントス、漸ク宿ニ持参スベシトノコトヲ悟リ、宿ヲ言ヘバ彼其宿ハ常ニ得意トセルコトヲノベ時間ハト問ヘバ四時ト四指ヲ出ス、ソレヨリ諸所ヲ見物シテ六時帰宿スレバ既ニ卓上ニ買入品紙箱ニ入レテ表包ノ儘持チ来リア

リタリ、其機敏且ツ一見ノ客ニ對シテスラ先ノ如キ熱心親切ニ驚ケリ、米商人ガ近来世界各地ニ雄飛シ成果ヲ収メツヽアルモ、カヽル親切熱心サト機敏ニ活動シツヽアリテ各地ニ販路ヲ広メツヽアルモノナルコトハ吾人ノ大イニ範トスベキナリ

この商店街視察では先づ、五セント～一五セントまでの廉価な日用品を扱い、販売員には総て女性を充て、通路はせいぜい一尺五寸～二尺位に限定して正札付きの豊富な品揃えに徹した間口五間、奥行一五間で、一階のみのテンセントストアという新興商店の用意周到な商法を紹介している。ついで繁盛していると思われる店舗のほとんどを実見し、親切丁寧な接客と商品管理の行き届いた好感を与える店が繁栄するのは何処であっても変わらないことを観察し、売り場の略図を掲げている。さらに、カラーボックスを購入した時の店員とのやりとりを詳細に記し、その販売に対する熱意と一見の客への親切な応対と機敏なサービスに感銘を受け、アメリカ商人の世界的販路拡大の一端をかいまみた思いで、大いに模範とすべきことを強調している。

三〇日（二九日）、朝七時四五分発のサウザンパシフィック鉄道でサンノセを経由してロサンゼルスへ午後七時四五分に到着し、アニバサトアホテルに投宿した。翌日は当地の日本人会を訪問し、書記長笠井三郎から諸種の情報を聴取し、排日の情勢は将来が憂慮されるほど厳しいことを慨嘆している。その後主要市街地を見物しているが、サンフランシスコと大同小異であるからと印象記は省略している。七月二日（一日）は、自動車を雇って野菜市場、ターミナルマーケット、日本人町、「支那人町」、ハリウッド、日本人経営農園、油井等を見学している。なかでも東洋人排斥の現状を見て、「悲憤ノ暗涙ニムセ」びつつ、移民労働者の由来を踏まえて次のように述べている。

由来米資本家ハ自国労働者ノ賃銀高キニ苦シミ、勤勉ニシテ忍耐ツヨク且ツ安價ナル労働者ヲ世界ニ物色シ、支那人ニ着眼シ其入国ヲ希望シ歓迎セシニヨリ、潮ノ如ク渡航セシ支那人ハ粗衣素食ニ甘ンジ勤労セシヲ以テ一時大イニ用ヒラレシモ、内国内労働者ノ賃銀上反感ヲ買ヒ、生活又低ク到底米人ト伍シ難キヲ知リ、双方相マッテ支那人排斥ノ声高マッテ入国禁止マデ至リ、苦シムモノハ支那人ヨリモ却ツテ米資本家ニシテ忽チ労働者ノ横暴ヲ高ムルコト、ナリ、之ニ代ルベキ労働者ヲト本邦人ニ着眼シ渡航ヲ歓迎セシニ、又今ヤ其轍ヲフミ第一次第二次第三次ト排日法案ハ国会ヲ通過シ、本邦人ニハ土地所有権ヲ与ヘザルノミカ既得分マデ買ヒ戻シ、絶対ニ与ヘザル上入国ヲ制限スル等回ヲ経ルニツレ峻烈ニ言語道断ノ法ヲ造ル等ノ横暴、今ヤ其影響ヲ痛切ニ蒙レルヲ眼前ニシテハ自ラ慄然タラザルナリ

安価な賃金と低い生活水準が排斥のもとであると指摘しつつも既得権までも剝奪する偏見のすさまじさに慄然としながら、「此上ハ日支人相提携シテ生活品性ノ向上ヲ計リ、彼等ノ排日ノ口實ニ苦ムニ至ラシメ、内外呼應シテ彼等ニ反省セシメ處期ノ目的ヲ達スルニ外ナシ」と、日中共同してこの問題に対処しなければならないと、悲憤の想いを記している。

なお同日、八月一四日シアトル発のアリゾナ丸への乗船を予約し、二一〇ドルの運賃のうち、一〇〇ドルを手付金として支払っているので、渡欧のことはこの時点で断念している。

七月三日（二日）は午後五時発のユニオンパシフィックレールウェーの寝台車でソルトレークシティーへ出発したが、発車までの待ち時間を利用して、帰国の乗船を八月一九日発のアラビア丸に変更し、さらに現地邦人の三人から排日についての意見を徴している。汽車賃四一ドル三一セント、寝台料金九ドル六九セント。四日午後七時五〇分に

ソルトレークシティーに到着し、ユタホテルに宿泊した。翌五日（四日）、朝食後家信数通を認めたうち、外村市郎兵衛への便りには「なほはやく来ればよしと思ふなり見るも聞くもおどろきのたね」との戯歌を添えている。この日はユタ州庁やモルモン教の本山、海水浴場を見物した後、ホテルへ帰り清算を済ませて、鉄道でシカゴへ向け出発した。六日（五日）午前七時、イエロストーンで下車した。同地までの汽車運賃一三ドル五〇セント。自動車でイエロストーンパークの大自然を九七マイルにわたって楽しんだ後、グランドキャニオンホテルに宿泊した。翌七日（六日、日曜日）は、自動車で九七マイルを走り、途中「林間ニ天トヲ張リ、家族自動車生活ヲナセル数十ノ自動車ノ一群ニ會シ、其奇シキ旅景ニ驚キ」つつ、コティー駅に着き、シカゴまでの乗車料金四九ドル二〇セントと寝台料金一〇ドル八八セントを支払い、午後八時一五分発車、自ら洋服の繕いをした後、就寝している。

八日（七日）からは、車中国民体操をしながらセリダン、ニューキャッスル、リンカーン、オマハ等の沿線都市の印象が記され、訪米感想の要約が始められる。十日（九日）の午前七時三〇分、シカゴに到着しブラックストーンホテルに投宿した。早速徒歩で最繁華なステートストリートの商店視察に出かけ、「商店ハ十階ヨリ貳拾階迄トシ大廈高楼ノ櫛比セル有様繁華ヲ思ハシメ、各商店ウィンドウヲ競ヒテ美麗ナルコト言ハン方ナシ」と、大建築物の連なる商店街に感嘆している。

さらにワシントン街のマーシャルフィールドという高名なデパートを訪れ、エレベーター上り下り各二〇台を備えたデパートの各階を丹念に視察している。例えば、勝治郎自身関わりの深い洋服や日用品小間物品の展示については次のような観察記を残している。

洋服ハ二間ニ四尺巾四方硝子戸棚ニシテ両面ノ硝子戸ヲハツシテ洋服ヲ掛ケタルマヽ、取出セル仕組トセリ、其

間ニ洋服部屋トモ云フベキ室設アリテ又販売台モ準備シアリ、洋人日用品同小物ハ総テ全部硝子ノ台ニテ、中ニハ客前上方ニ金箔ヲ用ヒテ電気ヲ隠シテ電光ヲ放タシメ、角ハ皆丸形トシ一区毎ニ販売員ノ受持ヲ定メテ、台ハ一シキリツヽニシテ入口ハ一尺四、五寸位ヲ開キアリテキマリヨク見エ、ケースノ全部朱丹ニシテ立派ナルニ一驚ス

洗練された商品の陳列配置や照明の仕方からガラスと紫壇でできた陳列ケースの造りに至るまで、細部にわたって書き留められ、観察者の真剣な目を窺うことができる。

一一日（一〇日）の午前中は家畜屠殺工場を見学し、機械を使った分業によって整然と多数の食肉の生産される様を詳述し、午後は同郷人でシカゴ大学に留学中の塚本幸七の案内でシカゴ大学を訪問して、あたかも大公園のなかにあるような壮麗さと規模広大、設備の充実振りを賛嘆している。

一二日（一一日）は、ジャクソンストリートの米穀取引所で市場を一見した後、電話交換会社に赴いてその実況を一巡視察し、日本領事館では旅行券にメキシコ旅行の証明を請けた。午後から塚本の案内で通信販売会社を訪問し、取扱商品は三〇〇万種に上るという説明を受け、一日に二〇〇貨車に達する商品発送の作業の現場を見学し、「同店の店員ハ一万三千人ニシテ其食堂ハ一時ニ六千人ヲ入ルヽコトヲ得ト、以テ其廣大ナルヲ推知スルニ足ラン」とその印象を締めくゝり、貰い受けたカタログのあまりの大きさに驚き入っている。一三日（一二日）は、コンチネンタルコマーシャルバンクの金庫を見学し、その他に電気会社、駅舎、郵便局、汽車鉄橋、公園の見学に費やしている。一四日（一三日）の午前は美術館見学に出かけ、夜半一一時一五分発の汽車でボストンへ向け出立した。

一五日（一四日）朝七時一五分にデトロイトで一時下車し、精三の旧学友アンダーソンの出迎えをうけ、その家庭

を訪問し歓待をうけた。この日、アンダーソンの案内でフォード自動車製造会社の工場二カ所を午前と午後に分けて視察し、原材料の製鉄生産から完成した自動車が列車に積載送付されるにいたる全工程を見学している。午前中に出かけた工場では、一日の生産量を「製鉄壱千噸、炭量弐千弐百噸、従業員四万五千人、総坪数六百六十五エーカー（弐百六十六町、則チ八十万四千坪）、動力五千万馬力、一日ノ自動車製造高七千台、塗料、硝子ノ製造所モ其内ニアリ、尚副産物トシテ肥料瓦ス製造工場モアリ」と書き留め、広大な設備が完備し、作業過程が微細にいたるまで機械力で分業化された工場を、「真ニ理想ノ一大工場」との賛辞を贈っている。さらに「同工場ヲ参観シテ余等ノ肝ニ銘シタルハ職工一同熱心ニシテ極力従業セルト、カクモ広キ工場内、一ノ不用品ハジメ塵埃ヲモ見認ムコト能ハザルコトコレニシテ、米人ノ能率増進ニ専心ナルガ大イニ範トスベキナリ」と、徹底した能率向上の姿勢と清潔な工場管理に敬服している。それから、市街を見物し、一〇階からなる履物専門店では男靴、上等子供靴、安物女靴、上等女靴から倉庫にいたるまで各階を委細視察し、市民の遊覧する公園内をドライブの後、アンダーソン家では「夕食ヲ家内一同ト共ニ饗應サレ、食後ピヤノヲ弾シ国歌ヲ合唱シテ慰撫セラレ、十時自動車ニテ送ラレ、切符荷物ノ世話マデ親切至ラザルナシ、実ニ其厚志ニ感泣セリ、人ヲ待ツコトカクアリタキ事ナリ」と、旅先で受けた厚情に感激しつつ、夜一一時一五分発の寝台列車に乗り込んだ。

一六日（一五日）、朝七時ナイヤガラ駅に下車し、英領カナダのクリフトンホテルに投宿し、終日大瀑布の見物に充てた。一七日（一六日）、ナイヤガラホール駅から午前七時三〇分発の列車に乗車し、バッファローを経て、オルバニーで乗り換えて午後一一時ボストン駅に着し、サマセットホテルに宿泊した。一八日（一七日）は、図書館、州政庁、詩人エマーソンの住居と墓地、ボストン大学、ウェスリー女子大等を訪れ、ヲルサム時計製造会社を訪問したが終業直前であったため巡覧できなかった不運を嘆いている。とくに独立戦争時のレキシントン古戦場では、苛政に

抵抗して独立の血を流した勇士の銅像の前で「身ハ排日ノ渦中ニアルヲ忘レ、當時ノ米人ニ同情ノ念沁々トシテ覚ユ、低徊去ルアタハズ」と、往時を偲び強い感懐を抱いている。

一九日（一八日）、午前中は美術館に赴き、一二時発の列車で、汽車賃一一ドル四〇セントを払ってニューヨークへ向い、午後五時一〇分に到着し、精三の知己の関根なる邦人の出迎えを受け、国元から到着の書類を手渡され、コンモンドルホテルに宿所を取った。小憩の後、関根の案内で七〇〇二軒の支店を有し、年間売上高四二〇〇万ドルのチェーンストアーの洋服工場と商店を見学し、「該チェーンストアノ店長ノ上級者ハ年収六千弗ニ利益ノ一割二分五厘ヲ配当サレツヽアルト、各店巡回役アリテ熱心ニ注意シ各店連絡ヲトリ商務ノ円滑ヲ計レルナリト」という説明を受けている。二〇日（一九日）は商船会社出張所に出かけ、帰国予約のアラビア丸の出帆が八月一七日午後一一時シャトル発の九月一日横浜着と確定したことを伝えられ、井上出張所長に在留邦人などの当地の状況を尋ねている。二一日（二〇日）は、日曜日のため午前中は家信を認めることに費やし、午後はグラント将軍の墓地と美術館を訪れた。二二日（二一日）は、当市第二のデパートであるブロードウェー三四丁目のメーシデパートでトランク・提カバン・ナイトガウンの買物をし、店内を視察して、「同商店ハ當市第二ノデパートニシテ七階造ヲ店舗ニ使用シ、販売員多ク婦人ニシテ来客又八分迄婦人ナリ、好評アル店ナリシモ商品比較的高価ニ見受ケ、シカゴ市ノマーシャルフィルドニ比スレハ貧弱ノ感ヲ抱キシモ、當市ニ於テ相當人気ヲ博セルデパートトテ来客各階ニ充満シ頗ル盛大ナリキ」との印象を得ている。二三日（二二日）、マンハッタンと株式取引所を見物した後、三四丁目のワナメーカーデパートでデトロイトのアンダーソンへの謝礼の手提カバン二個を購入し、各階を視察している。二四日（二三日）はセントパトリック教会を見学し、三四丁目のオールドマンデパートで土産品を買い入れている。二五日（二四日）はメーシー、サック、キンベル、ブラサー等のデパートを視察後、関根の事務所を訪問し、そのフリーポートの自宅で夕食の供応

を受けている。二六日（二五日）関根の案内で、ジョージボークフェルトという大きな雑貨卸問屋を見学し、「其見本陳列ヲ見ル、七階ヨリナル大ナル店舗皆見本ニシテ其品ノ豊富ナルニ驚キ余モ又時計一打ヲ買入レ、出デ、小間物、衣服、卸商店ニ案内セラレ是又在品豊富ニシテ支配人能ク説明ニ當リ、六階ヨリ全部一々商品ニツキ説明セラル、其熱心感服ノ外ナシ」と、商品の豊富さと支配人の熱心な説明に感じ入っている。二七日（二六日）は精三、重助と三人で八月一七日の乗船帰国までの視察の予定を協議したあと、クレス（KRESS）という、一〇銭（セント）、五〇銭（セント）、一ドルまでの商品を網羅した所謂十銭ストアーの店舗を視察した。夜はコニーアイランドで大道芸を楽しみ、一二時に帰宿している。二八日（二七日）は、日曜日のためほぼ終日、三七名に宛てた家信を認めている。二九日（二八日）、メキシコ領事館で旅券の裏書を依頼し、関根の案内で綿毛布類卸商の内部を視察し、夜はブロードウエーで活動奇術に興じ、一一時に帰宿した。三〇日（二九日）は、帰国までの旅費の予算を立て、正金銀行で現金を引き出し、ワナメーカー、ウルヲースステンセンストアー等で買物をしている。三一日（三〇日）は、暑熱のなか荷造、手荷物の発送をして明朝のニーヨーク出立の準備をしている。

八月一日（三一日）朝七時、ペンシルヴァニア駅からフィラデルフィアに向い、九時到着し、ワオルトンホテルに部屋を定め、自動車で独立館、フランクリンの墓所、ボールドウィン汽車製造会社、ウィリアム・ペンの館等市内の名所を巡覧している。午後はワナメーカー百貨店を視察し、その印象を次のように記している。

同店ハ米国一、二ノデパートメントストアニシテ、間口八十間奥行四十間ノ十階建ニシテ他ニ地下室二階アリテ外観美景色ノ壮麗ナル建物ニシテ内部ハ大理石ニシテ全部商品ヲ以テ充満セリ、来客又踵ヲ接スルノ盛況ニシテ、實ニ一名所タルノ面目ヲ施セリ、商品ハ衣服雑貨玩具書籍菓子履物ニ至ル迄全部ヲ網羅シ豊富ニ陳列シアリ

タリ

この日帰宿後初めて腹痛下痢を催している。

二日（一日）は、朝七時二五分発の列車でバルティモアに出発し、同所に途中下車して精三の友人のハインの案内でキューバ糖を原料とするアメリカ砂糖精糖会社を見学した後、列車はワシントンに到着してハミルトンホテルを泊所とし、小憩の後、ポトマック河畔やワシントン記念石碑をはじめ市内観光に出かけ、さらに夜は夜景見物に繰り出している。三日（二日）も市内観光に費やし、リンカーン記念館、ホワイトハウス、ワシントンの住家と墓所、アーリントン墓地を訪れ、午後四時五〇分の列車でワシントンを出発し、テキサスのホートオースへ向かった。途中四日（三日）はインディアナ州のリッチモンドを経て夕五時四〇分に着いたセントルイスで途中下車して、自動車で慌ただしく市内各所を巡察し、午後七時再び列車に乗り、五日（四日）の午後四時三〇分ホートワースの駅頭に日本綿花株式会社社員、小沢の出迎えを受け、同社事務所を訪れ綿花取引の景況を尋ね、その夜は同社宅で夕食と宿泊の供応を受けた。六日（五日）は、八時四〇分発の列車で一面の綿花畑をみながらメキシコへ向かい、サンアントニオに下車して、邦人経営食堂で夕食を喫し同市の夜景を観て、夜一〇時四〇分発の列車に乗り込んだ。

七日（六日）は米墨国境のラレドからメキシコへ入国し、八日（七日）、米国と異なって貧窮な惨然たる沿線の光景に憐愍を覚ながらサンルイスポトスを経て、ようやく午後九時にメキシコ市に到着した。直ちにレジスホテルに投宿したが、同市が沿線の光景とは非常な落差のあるアスファルトの広大な道路と石造の建築物を擁する堂々たる近代都市であることを「予想外ノ美観」として驚いている。九日（八日）は、日本大使館に赴いて古屋重綱公使からアメリカ日系移民の再移民地として有力な土地柄等の同国の状況を聴取した後、日系移民の成功者加藤商店の店内を視察

し、「商品ハ日本品、衣服、絹布、大巾モノ、陶器、屏風ノ類ニシテ、他ニ獨国品、佛国製玩具ニシテ、総テ墨国人ノ嗜好ニ適スルモノニシテ華客ハ皆墨国人ニシテ相当発展シツヽアリ」と、同商店の成功のもとはメキシコ人の嗜好に適した商品構成によると看取している。十日（九日）は七時二〇分の汽車でエルパソに向けて出発し、一一日（十日）はトレオン駅を経過して、終日北上する車中で過ごし、一二日（一一日）午後三時、エルパソ駅に到着したが、底意のある緩慢で煩雑な米国入国審査のため手続完了せず、予定の列車を諦め、折から来合わせた同地住人で鉱山事業を営む日系人李の周旋でライオブラボーホテルに投宿した。一三日（一二日）の午前中に妻の名義まで記載してようやく米国入国手続を果たし、李家において昼食を御馳走になり、市内見物の後、同家へ戻り、鉱山業の襄、医師の古河内という二人の日系人も来会して夕食を採りつつ懇談し、一同の見送りを受けて午後九時一五分発の寝台列車でサンフランシスコへ向かった。一四日（一三日）はユーマーをを経て、非常な炎熱のなか砂漠地帯を通り抜けて、原油の湧出している石油坑を眺めながら、午後七時三〇分ロサンゼルスに着いて、同夜八時五〇分のサンフランシスコ行きの寝台列車に乗り換えた。米大陸の交通の便利さ、なかでも鉄道の発達に感銘を受け、米国の鉄道の現況を「鉄道総延長哩数　四千萬哩、機関車数　六万九千輛、客車　五万七千輛、貨車数　貳百四十万輛、従業員　百八十万人ナリ」という数字を列挙している。一五日（一四日）は故郷の盂蘭盆を追憶しながら、一〇時三〇分にサンフランシスコ駅に到着し、午後一一時四〇分のシャトル行きの切符を購入した。英国へ向かう精三とは同地で分袖することになった。

エルパソの李家への礼物として果実盛器三個を郵送し、三人の送別の晩餐と旅費の清算を済ませ、精三の見送りを受けた後、勝治郎と重助は初めての二人だけの乗車経験に困惑を重ねながらようやく指定の寝台車にたどり着いた。寝に就いたのは午前一時であった。両人とも下痢を催し、感応丸を服用している。一六日（一五日）は終日車中。下

痢は続き体調不調、心身の疲労を覚えている。一七日（一六日）朝、ポートランドで八時三〇分発車の列車に乗り換え、午後二時四五分にシャトル駅へ着く。直ちにNPホテルへ投宿したが、明朝乗船予定のアラビヤ丸は予定を繰上げ一四日出航してしまったため、三〇日発のアラバマ丸に変更し、以後十日間同ホテルに宿泊することになった。「清書日記」には一八日（一七日）と一九日（一八日）の日記は欠落している。「下書日記」をみると、両日とも雨天で下痢症状は続いている。一八日（一七日）は洗濯物の仕分けをし、一九日（一八日）は乗船変更を日本へ知らせている。二〇日（一九日）の日記には両人の下痢がなお止まず、同日午後から勝治郎の方は止んだが、重助は重症で、翌日須賀田医院で診察を受け、「異常ナク水変リノタメナラントノコト」にやや安堵し、二四日（二三日）まで共に読書と静養を続け、二五日（二四日）、二六日（二五日）とようやく公園見物へ出かけることが可能になった。「清書日記」はこの日で終わり、以後は「下書日記」の記述である。

二七日（二六日）はタコマへ出かけて、大阪商船会社の大橋に面会し、アラビア丸の時日変更に抗議し、アラバマ丸の確認を取ってから、同道して市内見物後、汽船でシャトルへ帰り一時帰宿して、午後一一時三〇分発の汽船でバンクーバー視察に赴いた。二八日（二七日）朝七時四五分上陸し、市内を視察し、「家屋構造大ニ立派ニシテ、五階ヨリ十五階ニ至ル石造煉瓦造ノ高屋櫛比シ、道路ハ木煉瓦ヲ敷詰メ車道十間両側人道三間アリ、中間ハ電車ヲ通シ自動車往復織ルガ如シ、先ツ徒歩ニテ其大通ヲ視察ス、商店ノ陳列装飾等米国ヨリ品行能ク沈着味ヲ帯ビ、建築モ堅牢ニシテ優美ナリ、爰ニ英国ノ特色ヲ顕ハスヲ感ズ」との好印象を得ている。同夜の汽船でシャトルへの帰路についた。二九日（二八日）朝七時四五分シャトルに上陸し、帰宿小憩の後、税関で出国手続を完了した。夕方、勝治郎単独で「同地洋服ノ研究ヲナサント数店ヲ視察シ金尼十弗ニテ一着ヲ買入」ている。三〇日（二九日）、出発に備えて荷造を終えた後、市内視察に出かけ、「米国ノ終日ナリト重助氏ト活動写真ヲ見テ」帰宿している。

三一日（三〇日）朝九時三〇分、アラバマ丸の一二号B室に乗船した。同船は大正八年三菱造船所製造で、九六一七総トンの貨客船である。この日午後四時四〇分、ヴィクトリアに寄港した際、上陸して市内の議事堂、商業地、公園を自動車で巡覧し、六時出航して最終的に米大陸を離れて横浜へ向かった。以後帰国の船中では、国民体操、読書、英習字、囲碁、談話を日課とし、本宅新築設計図を考案して時を過ごしている。九月一五日午後一時横浜港に安着し、弟準五郎をはじめとする多数の出迎えを受け、午後八時四〇分の列車で京都へ向い、翌一六日は大垣、能登川で各々出迎えを受けながら一二時に京都へ着した。同日、早速、西村久次郎・中江富十郎・中江準五郎の三人の弟と、中江修吾・中江悌一の二人の養子、妻の中江きみと河井粂次郎の近親七人を集めて、日記をもとに渡米中の順路と感想談を語り、この渡米報告談話会は一九日まで連続したことを記して、「下書日記」は終っている。この報告談話会に出席していた悌一（後に改名、将悌）によると、勝治郎は「呉服店では駄目だ。これからは百貨店でなくてはならない」と、呉服店の百貨店化を力説したという。

むすび

呉服店事業の百貨店化を促すことになった一九二四年の勝治郎の海外商業視察は、欧米を一年間かけて巡るという当初の計画を縮小し、往復に約一ケ月、現地では約二ケ月を費やしてアメリカを中心とする北米諸都市の巡訪に切り替えられた。広大な自然と豊かな資源に恵まれ、一九二九年の大恐慌の発生へ向かっていたとはいえ、自動車文明が非常な勢いで発展しつつある新興工業国アメリカの富と勢威を痛感しながら、極めて熱心に視察して回っている。その旺盛な好奇心と熱意は青年のそれに匹敵する逞しさである。単に商工業のみでなく、大学、図書館、美術館、博物館、史跡、公園を実見して文化や生活様式に感銘を受け、現地の排日の傾向に常に注意をはらい憂慮を示し、旅先で

経験した人情の厚薄にも率直な感想をつぶさに記している。アスファルト道路と疾駆する自動車と高層建築群からなる近代都市の壮観に驚嘆するとともに、経営者としては規模広大で設備充実した工場、百貨店、テンセントストア、チェーンストア、通信販売店、雑貨卸商店を訪れ、清潔な職場、販売員への婦人の登用、接客の懇切さと熱意、工夫を凝らした商品展示、大規模な商店の豊富な品揃え等に深い関心を寄せている。

世事に通じた大人の見聞記としての日記のなかで勝治郎は、強い印象を受けた事柄を七月八日から記入しはじめ、日付に関わらず日記の空白部分に視察旅行の感想を次のような三七箇条（一九条は欠落している）に纏めている。

一、洋人ノ婦人ヲ大切ニシテ男女ノ懸隔ナク、婦人又ハ小児ノ如ク無邪気ニシテ遊戯ヲヨクナスコトコレナリ（船中處見）

二、布哇風土気候ニ接シ、気候温暖ニシテ夏冬ノ差少ナク風光明媚ニシテ至ルトコロ絶景ノ地多ク、我三景ト雖モ遠ク及バザル如ク感ゼシコトコレナリ

三、桑港ノ繁栄予想外ニシテ商店又発溯ナル意気充満シ、ウィンド活用商品陳列ノ巧妙ナルコト

四、各地ホテルノ威大壮麗ニシテ、装飾華美ナルコト我皇室ノ外ニ嘗テミザル雅麗ナルコトニ驚ク

五、言語ノ不通ハ千載ノ遺憾ニ感ズ

六、排日ノ渦中ニ入、其實情ヲ見ルニ人種偏見ニ基ク米人ノ傳導的発露トハ言ヘ、邦人ノ生活下級ニシテ米人ノソレト相入レザルト、生活下級ニ甘ンジ進展力ノ旺盛ニシテ、他日白人ノ生活ヲ脅スニ至ラントノ米人ノ恐怖モ一大原因タラン

七、政府ノ外交方針甚ダ不振ニシテ机上ノ空論ヲ以テ實情ニ遠ザカリ、百年ノ大計ナク苟且怠慢ニシテ一時彌縫セルカノ感アリ、常ニ好機ヲ逸シテ追従セル感アリ、五十年来ノ発展シツヽアリシ移民ヲ遂ニ放棄スルヤムナキニ至レルコト

八、政府ハ海外発展ノタメ貿易ヲ庇護シ、官商ノ思ヲ以テ陰ニ陽ニ策略ヲ劃策シ之ガ助成ニツトメ、正銀又特ニ被護ニツトメ

相提携シテ発展スベク、筋力労働者ノ渡航ノミニ任セズ、資産階級ノ商人ヲ多数渡米セシムベキナリ

九、西洋人ノ公衆道徳観念ノ強キニ驚ク、汽車中暑熱炎クガ如キニヨク乗客満員ニシテ堪ヘ難キ苦痛ヲ忍ビ、端然トシテ容姿ヲミダスコトナク、規律整然トシテ座席ヲ貪ラズ、車内ヲ汚スコトナク清潔ニシテ、一昼夜一度ノ掃除モナサヾルニ一ノ塵埃ヲモ生セズ、洗面器ハ使用後ハ必ズ自ラ拭ヒ、常ニ清潔ナルハ邦人ノイタク範トスルニ足ラン、便所又シカリ（桑港ヨリロザンゼルス、同ソルトレーキ間所見）

十、自動車ノ多キコト、及多キニ比シ事故ノ少キコト驚クノ外ナシ、人口七十萬人ノ市民ニ對シ十五万台ノ自動車、約四人半ニ一台ナルニ、互譲的精神ヲ以テ交通発達ニ當リ比較的怪我人ノ少キコト（ロザンゼルス所見）

一一、道路ノ完備整頓シアルコトコレナリ、田舎道ニ至迄尚アスファルト道路ニシテ交通至便ナルコトモナリ（〃上）

一二、本邦商人ノ貧弱ナルコト（桑港ロザンゼルス間）

一三、パブリックサーバント（公衆ノ僕）、民尊官卑、男女同権ヲ實見ス（各地見物）

一四、共有物ヲ大切ニスルコト、公園ノ一木一草ト雖モ立札ナクモ一ノ小枝モオラレズ、公衆物ノ毀損ヲ見ザルコトコレナリ

一五、労働者ノ精勤ナルコトナリ、男女ヲ論ゼズ其精勤熱心ナルコト實ニ愉快ニ見ユ、八時間労働ハ我二十時間ニ相當スルコト、思フ（各地ニテ）

一六、真實ニシテ欺偽ヲナサズコレナリ

一七、我地球上ニ於テ造化ノ神ノ尤モ巧妙ヲツクシタル風景ハイエローストーンパークナリト思フ（同地所見）

一八、各地汽車ニ上下ノ区別ナキモ乗客中貧困者ヲ見ズ（各地所見）

一九、〈欠落〉

二〇、禁酒ヲ勵行シテ一人ノ陶酔者ヲ見ズ、其意気遠大宏寛ナリ（同上）

二一、各住宅地ハイカナル富豪モ垣塀ヲ造ラズ互ニ協同シテ一地ノ美観ヲ増進スルニツトム（同上）

二二、食事ニ果實ヲ利用シテ衛生實利的ナルコト（同上）

二三、食料品ノ比較的安價ナルコト、一食十仙ヨリ十五仙ニテナスヲ得、普通六十仙以上ヲ食スル得ズ（飲食店所見）

二四、前後ノ順序ヲ堅ク守リ狡猾矯慢ナル挙動ヲナスモノナキコト（各地所見）

二五、人ニ接スルニ甚ダ親切ニシテ一見故舊ノ如キ親シミヲ以テ、道路ヲ訪ヌルモ人種ノ別ナク懇切ニ指畧シ来ルノコト（各地所見）

二六、人家稠密世界第一ナルモ些ノ排煙ヲ認メズ、煙突ハ唯蒸気ヲ噴出スルノミニシテ空気清潔透明ナリ、如何ニ各自ニ自省心ノアツキヲ感ズ（紐育）

二七、電話設置ノ自由ナルコト、申込料金僅ニ二弗五十仙ニシテ即日架設サルナリト、羨望ノ至ナリ

二八、電報モ各所ニ出張所アリテ、海外電報又ハ二通以上ノ電報アレバ電話ニテ通知次第集メニ来ル等至便ナリ

二九、汽車速力ノ迅速ナルコト一時間四十哩ヨリ四十五哩ナリ、故国列車の比ニアラズ

三〇、時間勵行ノ確實ナルコト（各地所見）

三一、米国中ニ於テ白人勢力ノ尤モ優勢ニ扶植サレタルヲ、シャートル市トス

三二、墨国モ米大陸中トテ土地豊穣物産豊富ニシテ、有望ナル地タルヲ失ハズ

三三、小賣商品ノ高價ナル事（各地所見）

三四、墳墓ノ整頓立派ナル事

三五、各個人ノ所得豊富ニシテ生活安易ニシテ、購入力旺盛ナルコト

三六、教育ノ普及完クシテ、タメニ一般ニ常識ノ発達セルコト

三七、機械力ノ應用盛ニシテ、タメニ綿密ナル注意ヲナス

右の見聞の要約をみても、その観察、洞察には正鵠を得たものが数多くあり、経営者としての勝治郎が非凡な人物であったことを十分に伝えている。

このアメリカ商業視察旅行の見聞のうち、以後の勝治郎の経営戦略の展開と深い関わりがあるのは、排日と日本政府の貧弱な移民政策、それに関連づけて海外発展に関する所見を述べた六、七、八の条項である。すなわち六・七条項では、人種偏見にもとづく排日の大きな要因の一つは米国人と邦人の生活水準の格差から来るものであり、低生活水準に甘んじながらの浸透を図る邦人に対して、米国人が将来の生活に危惧と恐怖の念を抱いているところにあると指摘する一方、政府の外交政策に確たる方針なく、彌縫追従策に終始したため五〇年間の移民の努力も空しく、彼らを棄民とせざるを得ない状態に陥ったと政府の無策を論難している。そして八条項で、海外発展のためには、政府と正金銀行が提携して貿易商を官商として全面的に庇護助成することによって、肉体労働者の渡米だけでなく資産階級の多くの商人の渡米を促す必要があると主張している。官民一体による海外発展論であり、後の三中井（みなかい）が政商的な路線を歩むことになるのは、一つは勝治郎が渡米中に国策の庇護もない愍然たる移民の状態を実見したことに基因するといってもよいであろう。この旅行は三中井の朝鮮・中国への伸展に一層拍車をかけることになったのである。

この意味でも、近代の日系移民問題をアメリカ大陸と中国大陸に分けて別々に論じることは当を得ていないのであり、両者は形影相伴う国際関係にあったことがもっと強調されるべきであろう。

（1）瀬岡誠氏は「江州系企業者の特性―企業者史的分析―」（安岡重明・藤田貞一郎・石川健次郎『近江商人の経営遺産―その再評価―』〈同文舘、一九九二年、所収〉）において、近江商人系企業者の朝鮮・満州における広域活動を数人の経歴を取り上げて追究している。

(2)　『神崎郡志稿』上巻（大正一三年）、五四一頁。

(3)　同書、七一七頁。

(4)　『滋賀県市町村沿革史』第五巻（明治一三年、弘文堂より復刻）、四六四頁。

(5)　『滋賀県市町村沿革史』第五巻によって作表したが、本書がどの様な基準で農工商を類別したのかは不明である。

(6)　中江章浩氏所蔵。この外、三中井の家訓は『蒲生郡志』（大正一一年）にも載せられている。

(7)　後掲、註(12)参照「清書日記」。

(8)　『五個荘町史』第三巻、史料Ⅰ、九〇四頁。

(9)　前掲、「清書日記」によれば、この東京呉服支店は、大井町にあった。

(10)　前掲、『五個荘町史』所収の、昭和一三年発行「三中井要覧」では、晋州支店は三九年の開設と記している（八四三頁）。また西村久次郎家には「大正三年合名会社結社記念三中井四兄弟」と注記した写真が残っている。三中井の法人結社はこの時に始まったと考えられる。勝治郎の存命中に編纂された中西利八編『財界人物選集』（昭和四年）の中江勝次郎の項には、高等小学校卒業から訪米までの事歴が次のように盛り込まれているからである。「家代々呉服及び雑貨を業とし、君又高等小学卒業後親戚山脇呉服店に入り斯業の実務を修得す、年二六歳父の喪に会ひ家に帰り祖業を継承し傍ら呉服卸商を創む、二八歳父の遺産を舎弟三人に等分し協力一致業務に尽力せん事を誓ひ合資とす、斯くて朝鮮の利源開発に着眼し二弟をして大邱及晋州に支店を開かしめ明治四十四年京城に本店を移し、後ち元山釜山及平壌に支店を置き京都に仕入店を設け大正十一年業務の発展と共に株式会社組織となす、尋いで大垣東京木浦岐阜成興に各支店を朝鮮鳥致院興南に出張所を開き益々発展を図る。」

(11)　中江将悌氏（勝治郎第二養子、実父は富十郎）談（一九九三年九月二四日の聞き取り調査）。なお、勝治郎には第一養子中江修吾（実母は勝治郎姉）がいて、昭和一六年頃に隠退した三代目勝治郎の跡をついで三中井の社長になり四代目勝治郎となった。

(12)　『明治大正昭和　神戸人名録』（日本図書センター、一九八九年、大正編）。

(13)　中江将悌氏所蔵。

(14)　小泉家は享保八年麻布商を創業し（『日本繊維商社銘鑑』東京信用交換所、一九八五年）、明治四年大阪に開店した（『近江神崎郡志稿』五巻）老舗である。

本稿は一九九三年度に同志社大学から国内研究員を認められ、一九九四年度の同志社大学学術奨励金を交付されたことによる研究成果の一部である。また本稿は、一九九四年一〇月一七日の同志社大学人文科学研究所第四研究会における報告に加筆したものである。なお、三中井に関する貴重な史料を提供して頂いた中江将悌氏と中江章浩氏・西村夫佐子さんに深謝する次第である。